

タイトル：平成 31 (2019) 年度 教育セミナー

日時：2019 年 9 月 19 日 (木) ~22 日 (日)

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室 (303)

中田 麻理 (立教大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士後期課程 3 年)

私の専攻はフランス文学で、1968 年以降断続的にパレスチナ人たちと関わり、その交流を文学作品の形で残したジャン・ジュネという作家の研究をしています。現在準備している博士論文では、彼の 1940 年代の作品を主に扱う予定であるものの、やはりパレスチナ問題について知っておく必要があるのではないか、というモチベーションでセミナーに参加しました。そのため、当初は自分の専攻とは全く異なる研究分野のセミナーに参加するのだという意識でしたが、実際には自分の研究とさまざまな点で関わることに気づきました。

第一に、中東世界もイスラーム世界も、フランスと決して無関係ではありません。それどころか、かつてアフリカ大陸の広い領域に加え、レバント地方の一部を植民地として領有していたフランスは、これらの地域とこの上なく深いかかわりを有しています。またそうした状況は、当然ながら文学作品にも影響を及ぼしています。例えばジュネの服役中の生活を題材とした小説『薔薇の奇蹟』では、少年院の中の有力者という意味で *caïd* という語が使われています。セミナーを受講する中で、何人かの先生から、この語がアラビア語由来であるというご指摘をいただきました。現在、ジュネの従軍歴を繙く中で、改めてアラビア語の地名の多さに驚いています。今後自分の研究を深めていく中で、このような地域的な関わりを意識していくことも重要なのではないかと考えるようになりました。

第二に、現代アラブ文学との関わりもあります。フランス文学が通常フランス語で書かれたフランス人による文学を中心に定義されるのとは異なり、現代アラブ文学は、アラブ地域の状況を表す文学作品を意味し、さまざまな言語で書かれた、さまざまな民族の作家による作品を含む可能性があることを今回のセミナーで学びました。そのように考えると、実際にシャティエーラの惨状を証言し、パレスチナ人たちとの交流の中で書かれたジュネの最晩年の作品は、広義のアラブ文学の中に位置付けることもできるかもしれません。少なくとも、パレスチナの他の文学作品の中に位置付けていく作業が今後必要になるのではないかと考えました。

以上は自分の研究に直接関わる点ですが、セミナーを通してフランスでのムスリム系移民・難民・留学生の状況について他の受講生と話したり、文化人類学や政治学などの全く異なる研究方法に触れたことも貴重な経験でした。地域を意識するという形で、今後自分の研究に活かしていきたいと思います。